僕と七つの殺意

レンタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕と七つの殺意

【Ｎコード】
Ｎ２２１８Ｒ

【作者名】
レンタン

【あらすじ】
人なら誰でも一度は抱くことがあるだろう、殺してしまいたいと思う気持ち、殺意を。でもその殺意は実行に移すかどうかはその人次第だ。大抵の人は良心で、理性で、思いとどまって過ちを犯すことはない。それでも一部の人は気持ちの昂り抑えきれず、凶器を手にして絶対に乗り越えてはいけない一線を越えてしまう。ここで一つ思うことがある、もしそんなとき誰かがその抑えきれない殺意に気がつくことができたら……。

～プロローグ～

～プロローグ～

登場人物

七時（しちじ）　好助（こうすけ）　２４歳　誕生日８月３０日

この物語の主人公。大手食品メーカーの営業部に勤務している。入社３年目で仕事ぶりは至って普通。よく言われることといえば、「よく気づくな～、お前、そんなこと」とか、「そんな小さなこと、よく気がつくわね」とか、そんなことが多い。小さなことによく気がつき、誰にでも気を配れる優しい性格。

七星（ななほし）　逢（あい）　２４歳　誕生日１０月４日

大手化学メーカーの経理部に勤務している。最近は何もかも上手くいかなくて……。

プロローグ

僕の名前は七時好助、ちょっと変わった苗字を持つごく普通の会社員だ。夢があるわけでもない、志があるわけでもない、人望があるわけでもない、何か特別な技術を持っているわけでもない、彼女がいるわけでもない、ただ人よりもよく小さなことに気がつく、本当にただそれだけ。

ある日僕はこんな話を耳にした。

人には誰にでも殺意が芽生える瞬間がある。でもそれ実行に移すかどうかはその人次第だ。大抵の人は良心で、理性で思いとどまるが、どうしても抑えきれず過ちを犯してしまう人もいる。

ここで一つ思うことがある、もしそんなとき誰かがその抑えきれな

い殺意に気がつくことができたなら。そしてその殺意に明確な目的、つまり動機があって、相手がはっきりしていれば、思いとどまらせることができるだろうと。

1、頼まれた仕事

1、頼まれた仕事

ある初夏の少し肌寒さを感じる日、外は朝からしとしとと雨が降り続いている。空には分厚く黒い雲のかたまりがあって、路面の水たまりを絶え間なく雨粒が叩いていく。

梅雨は真夏が訪れる前に人々を絶望へと突き落とす、この暗くどんよりとした空によって。

時刻は午前１１時過ぎ、仕事に一段落がついた僕は椅子から立ち上がり、後ろの窓から薄暗く雨が降り続く外を見つめている。

「七時ー、おーい、七時！」

オフィスの奥の席から課長の声が聞こえてくる。

「はい！」

僕はその声にすぐ反応して外を見るのをやめ、課長の机に歩いていく。

「今、空いてるか？」

「はい！」

「そうか。じゃあ、今からここに行ってくれないか？」

そう言われＡ４２枚の簡単な資料を渡される。「〇〇化学　定期契約更新について」、ここはうちの会社の古くからのお得意様だ。しかし僕が入る３年前までは誰もが相手の気難しい部長を嫌がって、決まっていた半年ごとの定期更新の度に冷や冷やさせられたそうだ。ところが僕は入ってから１年目でいきなりこの大事な仕事を任され、何事もなく平然とした顔で会社に戻ってきた。それがよほど評価されたのか、僕はそれから度々気難しいお得意様の営業に出向くことが多くなった。

「いつものですね。分かりました、今から行ってきます」

「おうっ、ありがとな。君はいつも頼りにしてるよ、小さなことに

よく気がつくし、よく気配りもできるしな。おかげで安心して任せられるよ。まあ、普通の営業だと月並みだがな」
「課長、それは酷いですよ」
「ははっ、すまん、すまん。まあ、とにかく頼むよ。終わったら電話を1本くれよ、そのまま昼休みにしていいから」
「はい、分かりました。では行ってきます」
課長に頭を下げると席に戻り、パソコンを切ってかばんと傘を手に持ってオフィスをあとにする。廊下を歩いていきエレベーターに乗ると、1階まで降りていく。
「七時さーん、お気をつけて」
「ありがとう」
外に出るとき受付の女性から声をかけられる。彼女は星野さんといって僕の同期で大学も同じ、仲のいい友人の一人だ。彼女に対して恋愛感情はない。その証拠に前に好きな人の相談を受けたことがあって、今は勇気を出して告白したらしくつき合っているそうだ。それは最近あった嬉しい出来事の一つだった。

外に出ると耳に“ポツポツ”と早いリズムの雨音が響いてくる。僕は傘を差して、少し早足に歩いて行った。

2、告げられた別れ

2、告げられた別れ

取引先までは歩いて１０分ほど、その間降りしきる雨は少しずつ強くなり、傘を途切れなく早いリズムで“ポツポツポツポツ”と叩いていく。途中立ち止まり傘をずらして見上げた空は、もうすぐ太陽が一番高く昇るというに、さっきより黒い低い雲でますます暗くなっている。それはまさに悪夢のようで、星の見えない都会の夜空よりも酷く感じられた。

そういえば今年の梅雨はいつも以上に雨の日が多い。普通は梅雨の谷間といって、４，５日に一度雨雲が途切れ晴れるものだが、６月の半ば過ぎに梅雨入りして今日でもう２週間近く、ずっと雨が降らなかった日が１日もない。しかも雨が上がっていた時間帯も、隙間なく雲が空を覆い続け、不気味に暗く曇っていた。

しばらくして取引先の会社のビルについている看板が見えてくる。雨足が強まったせいで若干濡れてしまったスーツ、かばうにように前傾で走り出そうする。

「待ってよ！　待って！！」

ところがそんなとき突然僕の耳に聞き覚えのある女性の声が聞こえてきた。走り出すのをやめて取引先のビルの前に立っている男女に視線を向ける。

「ごめん、僕はもう君のこと……」

「酷いよ！　いきなり今日別れようなんて！　他に好きな人ができたからって！！」

「でも……、もう好きじゃないんだ、君は」

「そんな……、言ったじゃない！　結婚しようって！」

「それは……、ごめん……、さようなら」

「ま、待ってよ」

別れを告げて走り去っていく男性、女性は呼び止めようとするが、振り返ることなく相手の姿は小さくなっていく。その女性は確かこれから入る取引先の会社で見かけたことがあった。といっても話したわけでもなく、ただ社員食堂で昼ご飯を食べたときに近くに座っていて、姿と声を覚えていただけだった。
髪はストレートで長く端正な顔立ち、身長は１６０センチちょっとで足が長くスレンダーで、とてもきれいな女性。魅力的で心惹かれたといえば、決して嘘だと言えなかった。

１分ほどして男性の姿が完全に見えなくなると、立ち止まって見つめていた僕と、別れを告げられた彼女は振り返って歩き出し、傘を閉じてほぼ同時に自動ドアを通り抜けた。

3、思いつめて……

3、思いつめて……

「お待ちしておりました！」

中に入るといつもは受付カウンターにいる女性が、目の前に立って声をかけてくれた。

「あれ？　いつもは……」

「先ほど電話をいただきまして」

「そうだったのか」

（なんだ、連絡してくれていたのか。なら、そう言ってくれればいいのに）

「はい！　部長が上でお待ちです。エレベーターで８階へどうぞ」

「そうか、ありがとう」

軽く頭を下げてお礼をすると、奥に二つ並んでいるエレベーターに向かう。するとちょうど右のエレベーターのドアが開き、先ほどの女性が入るところだった。

「すみません、乗りまーす」

手を挙げ、声を出して走っていき乗せてもらう。

「あっ、何階ですか？」

抑揚のない小さな声で聞かれる。

「８階です」

「えっと……、あっ、同じか……」

さっき押した自分の階も覚えていないのだろうか、まさに心ここにあらずといった感じだ。少し心配になったので、ドアが閉まり動き始めてすぐ声をかけてみる。

「あの……、大丈夫ですか？」

「えっ、あっ……、うん」

頷いてはいるもののかなり落ち込んでいるのが分かる。

「あまり思いつめないでくださいね」

「……ありがとう」
本当はもう少し話してもよかったのだが、僕はあえてそれ以上は言わなかった。
こういうときにいろいろとしつこく声をかける人もいるが、僕は彼女の気持ちを察して必要以上に干渉しなかった。
８階に着いてドアが開くと彼女が先に廊下に出て、僕が行くのとは逆のほうに歩いて行った。
（あっちに彼女のオフィスがあるのか。まあ、すぐには何もないと思うけど……、一応ちょっと気にかけておくか）
一方、僕は彼女が行ったのとの逆方向、右側に歩いていき、奥から２番目の「部長室」と書かれた札がかかるドアを叩いた。

１時間後、１２時過ぎにいつも通り部長との話を終え、僕は頭を下げて部屋から廊下に出る。エレベーターに向かって歩き始めると、ちょうど遠くのほうで髪の長い女性が非常階段を昇っていくのがかすかに見えた。
（ん？　確かこの上って……、おいっ、まさか……）
そう、実はこのビル、８階が最上階でその上は屋上になっているのだ。ただならぬ予感がした僕は廊下を軽く走り、彼女を追いかけて非常階段を駆け上がった。

4、自分への殺意

4、自分への殺意

階段を駆け上がり、屋上へ続くドアを開けると、落下防止用の鉄柵に足をかけようとする姿が目に入った。足元には遺書と書かれた封筒が置かれている。どうやら間にやったようだ。

でもまだ僕に気がついていない彼女、慎重に言葉を選んで声をかける。

「やめろ」

こういうときやたら大きな声で止める人もいる。しかし彼女はまだすぐに飛び降りるような危険な状況ではない。僕は返って気持ちを昂らせないよう、冷静に諭すように声をかけ近づいていく。

「いやよ！　私はもう決めたの！　ここから飛び降りるって！」

「そうか。なら、好きなようにしろよ。でも、痛いだろうな……」

「えっ、痛い？」

彼女には意外だったのだろう、僕が止める言葉を口にしないで痛みを気にしたから。後ろ振り向いて僕に目を合わせてくれた。

「そうだ。確かにこの地上から３０メートル近くはあって、飛び降りれば間違いなく死ぬ」

「そうよ！　だから私はそのために！」

彼女は再び前を向き、足を柵にかけようとする。

「待てよ！」

僕は少し声を大きくして、彼女の両肩を後ろからつかむ。

「離してよ！　離して！！」

すると上半身を左右に振って手を振りほどこうとする。でもそこは男女の力の差だろうか、僕はしっかり肩をつかみ続ける。

「落ち着け！　ちょっとでいい！　話を聞けよ！」

「いやよ！　私は死ぬって決めたの！　離してよ！」

「離さない！　絶対に！　君が僕の話を聞くまでは」

「離して！　離し！　……そう。じゃあ、私が話を聞けば？」
「ああ、離すよ、そのときはね、いちど……」
「そう。なら、聞くわ」
（よしっ！　彼女ははっきりとは聞いていない。なら、この殺意は間違いなく止められる）
そう彼女が今この場で抱いた殺意、それは絶望に打ちひしがれた自分に対するものだった。ただ僕にはこのとき確信があった、彼女の殺意は必ず止められるという絶対的な。それは今ひそかに賭けた保険によるものだった。

5、感じる痛み

5、感じる痛み

僕は彼女の肩を両手でしっかりとつかみ、一呼吸置いて話し始めた。

「痛いだろうな、ここから飛び降りたら」

「えっ、それだけ？」

「いや。確かに君は今、僕にはとても想像できないような痛みを心の傷に感じてるんだろう」

「そうよ。だからここから飛び降りて楽に……」

「楽になるもんか！」

彼女が口にした言葉、それは死んで楽になりたいということだった。でも僕はそれが一番許せなかった。

「えっ！？」

「確かに君は楽になるだろう、飛び降りて地面に身体を打ちつけて痛みを受けた瞬間。でもな、君が死んだことを悲しむ人がいるんだ」

「そんな……、そんなのこと言われても、私は……。はあっ、ひっくっ……」

彼女は声を出して泣き始める。

「例えば君のお母さん、お父さん。二人は君がもしいなくなったら、悲しみに暮れて、一生心の痛みに耐えて生きることになるんだ」

「でも……、ひっく、ひっくっ……、うわあぁぁーん、うわぁぁーん……」

とうとう大声を出して泣き始めてしまった。それでも僕は構わず話を続ける。

「それは君がこれから飛び降りたときに感じる痛みよりもずっと、ずっと痛いはずだ。それでも飛び降りるのか？　君は？」

「……うわあぁぁーん、うわあぁぁーん、うわあぁぁーん、うわぁーん……、はあっ、ひっくっ、ひっく、はあっ。……終わり？　それ

で？」
しばらくすると彼女は泣き止み、僕の質問には答えず、話が終わったことを確認してきた。
「終わりだけど……」
「じゃあ、離して！」
涙は見せたものの彼女の固い決意は言葉では変えられなかったようだ。
「分かった」
僕は言われたとおり肩をつかんでいた両手を離す。すると予想通り彼女は急いで足を鉄柵にかけよじ登ろうとする。

さっき僕は一度手を離した、確かに話は終わった。しかしだからといって黙って、このまま飛び降りさせるわけにはいかない。それに最初に賭けておいた保険もある。
僕は彼女が一段鉄柵を登ったところで、腰をつかみ無理矢理身体を引きはがした。

6、信頼させること

6、信頼させること

腰をつかんで身体を引き寄せると、今度は離れないようにしっかり後ろから抱きしめた。しかしそれでも彼女は鉄柵をつかもうと声を出して暴れる。

「ちょっと！　離してよ！　離して！！」

「だめだ！　絶対に離さない！」

「この！　うそつき！！　さっき離すって言ったじゃない！！」

この反論は彼女からすれば当然のものだ。一連のやり取りを見ても彼女のほうに正当性があるように思える。

でも現実は違った、僕は彼女の身体を鉄柵から引きはがし、飛び降りるのを許さなかった。ただそれにはちゃんとした理由があった。

「一度はね」

そうこれこそが僕が賭けた保険、“ああ、離すよ、そのときはね、いちど……”と言った意味、つまり一度は離す、しかし彼女が再び飛び降りようすれば、再度身体をつかむということだった。

「離してよ！　離し……、えっ？」

さっきまで暴れていた彼女も急におとなしくなって後ろを向き、目を開いて少し驚いた表情を浮かべている。やはり聞き覚えはあったようだ。

「よかった。ちゃんと聞いてたんだね」

「どういうこと？」

「僕を信頼してたってことだよ、無意識のうちにね」

「うそ！？」

「うそじゃない！　だから君は“一度はね”の意味が分かったんだ」

「意味？」

「そう。僕は君に話を聞くよう求めるときに小さめの声で言ったんだ、一度って。そして無意識のうちに君はその意味を理解した。つ

まりまた飛び降りようとしたら、止めてもらえるってね」
「そんなつもりは……」
「なくてもいいさ。でも現に君は僕が止めたことで自殺という過ちを犯さずにすんだ」
「でも私は本当にし……」
「言わなくていい。その代わりもう少し話を聞いてくれないか？」
「うん、分かった」
「自殺は自分を殺すこと、つまり立派な殺人なんだ。そしてそれは殺意によって起こされるもので、必ずそこには動機がある。だから自殺はただ止めるだけではだめだ」
「どうして？」
「それだと動機は残ったままになるからね」
「……あっ」
「うん、分かるよね。いずれまた自殺しようとする、動機がある以上は。でもだからといって今すぐには取り除くことはできない。現に君もまだ、残ってるだろ？」
「うん」
「それでもいいんだ。大切なことは信頼と安心を提供してあげること」
ここで僕は彼女の身体を１８０度反転させ、向かい合うとしっかり抱きしめてやる。するともう抵抗はしないで、僕の腰に手を回し身体を預けてきた。
「もう大丈夫だよ」
「うん、ありがとう」
彼女は僕の言葉に身体を密着させて頷いてくれた。

7、信頼すること

7、信頼すること

　そのまま二人はしばらく身体を密着させて抱きしめ合った。彼女はスレンダーな体型ではあったが、服越しに温かさが伝わってきて、柔らかな感触は僕に強く女性を感じさせた。できることなら彼女が満足するまでずっとこうしていたかったが、今は平日の昼間１２時も大きく回って、そろそろ昼ご飯を食べに行かないといけない。

「そろそろ……いいかな？」

そう言って身体に押しつけられていた頭を離して、彼女と向き合い話しかける。

「うん」

「落ち着いた？」

「もう大丈夫です」

彼女の表情は明るくなり、はっきりと答えてくれた。

「それはよかった。さてと、今何時だ？」

僕は腕時計に目をやって時間を確認する。すると予想していた通り、もう１２時半近くになっていた。

「あー、もう１２時半か」

「すみません、大切な時間を使わせちゃって」

「いいよ、気にしないで。それに君を助けることができたからどうってことないよ」

「優しいんですね」

「まあね。それだけが取り柄だから」

「あっ、そういえばまだ名前を……」

彼女に言われて初めて気がついた、まだお互いに名前を言ってなかった。

「言ってなかったな。僕は七時好助だよ、よろしく」

「七時さん？　何て書くの？」

「数字の七に時間の時だけど……」
「あははははっ、変な苗字」
「笑うなよ！」
「ははっ、ごめん、ごめん。私は七星逢っていうんだ、よろしくね」
変わった苗字で笑われるのはいつものことだったが、彼女の笑顔が見られて嬉しくなった。いい雰囲気なので思い切って昼ご飯に誘ってみる。
「逢さんか。そうだ！　これから一緒に昼ご飯とかどう？」
「はい、喜んで！」
彼女は笑顔で僕の誘いをオッケーしてくれた。でもその前に一つ済ませておかないといけないことがある、それは課長に電話することだ。
「よし！　じゃあ、僕はちょっと電話する用があるから先に下で待っていてよ、すぐに行くから」
「わかった。じゃあ、あとでねー」
「おうっ」
大抵の人はここで彼女を一人にせず、一緒に下まで降りて行くだろう。しかし僕は彼女をもう信頼している、ついて行かずに手を振って見送った。

8、気付かないこと

8、気付かないこと

屋上で彼女を見送った僕、すると急に靴の中の冷たい感覚に気が付いた。下を向くと深くできた水たまりに、絶え間なく雨粒が叩いているのが見える。

彼女を助けるのに夢中になり過ぎてすっかり忘れていた、ずっと雨が降り続いていたことを。慌てて左手に持っていた傘を差した。しかし身体を触ってみるとスーツが全身ずぶ濡れで、髪の毛もまるで風呂上がりのようになっていた。

（あー、びちゃびちゃだ、すっかり忘れてたなー。……ってことは、待てよ……、あっ、彼女も）

そう当然のことだが、彼女も今オフィスに戻って慌ててずぶ濡れであることに気づいたはずだ。

（大丈夫かなー。でもその前にやることが、課長に電話しないと）

時刻は１２時半過ぎ、少し遅れたが課長に電話をして仕事が無事終わったことを伝えた。ついでにさっき終わったところとウソをつき、１時半まで昼休みを取ることにした。

その後カバンから常備をしているタオルを取り出し、彼女が待っているはずの１階のフロアに向かった。

下に降りると入り口の前で彼女が待っていてくれた。

「ごめん、遅くなって」

「うんうん。それより大丈夫？　スーツずぶ濡れだよ」

「大丈夫だよ。中までは滲みてないから。あれ？　七星さんは濡れてないの？」

見るとなぜか彼女は服が全く濡れてなく、髪の毛も少し濡れている感じがするほどだ。

「ふふっ、着替えちゃった」

「あー、なるほど」
「こういうときのために替えをいつも置いてるんだ」
「へえー、しっかりしてるね」
「でしょ。備えあれば憂いなしだから。じゃあ、行こう！」
「おうっ」
二人は自動ドアを通り抜けて、外に繰り出す。傘を差して歩き出す準備をした。
「何にしよっか？」
「うーん、何でもいいけど……、七星さんはいつも何を食べてるの？」
「いろいろだよ。けど最近は定食屋さんが多かったかな」
「そうなんだ」
「うん。さっきフラれた人とよく一緒に行ってたから。七時さんはいつも何を食べてるの？」
「麺類が多いかな、ラーメンとか」
「そっか。あっ、なら、今日は私が行きたいところでいい？」
「いいよ」
「よかった」
そう言うと彼女が歩き出し、それに並んで僕もついて行った。

9、自殺の意味

9、自殺の意味

二人は水が少し溜まった歩道を、傘を差して並んで歩いていく。相変わらず傘を絶え間なくたたき続ける雨、しかしその“ポツポツ”という音の頻度は、1時間半前より幾分か弱くなった気がする。天気は、天の気持ちと書き、お天道様の気持ちが反映されているといわれることがある。さらにそれは人の気持ちとも密接に鼓動する。雨が降り続く梅雨の時期に暗くどんよりした気分になるのは、たぶんそのためだろう。もしかしたら彼女もフラれたときの気持ちに加えて、雨が降っていたことが自殺の決意に大きく影響したのかもしれない。とするとこの雨が止んだとき、彼女の心に降っていた雨も止んで晴れ渡る。僕にはそう思えた。

お店に着くまでの間、先に話しかけてくれたのは彼女だった。

「ねえ、七時さんて、私のこと、知ってたの？」

「ちょっとね。あの会社には結構出向いてるから」

「そうなんだ。今日はどんな用事で？」

「部長に会いに行ったんだ、契約の定期更新ことで」

「じゃあ、お得意様なの」

「そんなとこかな」

「そっか。でも偶然だね」

「偶然？」

「うん。今日七時さんが止めに来てくれなかったら、私今頃天国だったかも」

「天国か……、たぶん地獄だよ」

「えっ！？」

「自殺ってのはさ、罰当たりな行為なんだ。満たされないからって自分勝手になって、命を絶つ。でもそれには必ず悲しむ人がいて、

大勢の人に迷惑をかけるんだ。それに自分を殺す立派な殺人、そんなことした人は間違いなく地獄行きだよ」
「……」
少し厳しい言葉だったかもしれない、彼女はちょっと黙ってしまった。
「あっ、ごめん。言い過ぎたかな？」
慌てて謝る。
「うんうん、ありがとう。私間違ってた、七時さんのおかげで気が付けたよ」
「なら、よかった」
どうやら彼女はショックを受けていたわけではなかった。
会社から出てわずか3分ちょっと、もうお店に着いたらしく彼女が立ち止まった。

１０、彼女の想い

　二人が昼ご飯を食べたお店、それは彼女が先ほど別れた恋人とよく行っていたという定食屋さんだった。中で彼女は日替わり定食を、僕はミックスフライ定食を注文した。お店の席で向かい合って座り食べ終わるまでの間、彼女はいろいろな話を聞かせてくれた。

例えば先ほど別れた恋人がどんな人だったのか、いつ出会いどういう付き合いをしてきたのか。その彼の名前は一原友紀と言って、ちょうど半年ほど前に高校の同窓会で再会したのがきっかけになったそうだ。

帰りに少し人ごみ外れて告げられた彼からの告白、“僕は君のことがずっと好きだった”、一瞬でなぜだか身体が熱くなり気が付いたらホテルで一夜を共にしていた。でもそれが二人にとって大きなすれ違いを起こさせることになった。再会して一瞬で身体を預けてしまった私、結果的にそれが彼に全てを受け入れてくれたのだという誤解を抱かせることになった。それからの彼は別れを告げられる今日まで積極的で、リードして確かに私を引っぱってくれた。しかしあまりにも強引なリードは、時に自分勝手で不快な気持ちになることさえあった。それでも知らず知らずのうちについて行くことだけに必死になっていた私、一週間前にされたプロポーズはどこか納得できていなかったにもかかわらず、了承してしまった。
そして今日告げられた当然の別れ。ずっと蓄積されていた心の疲労が一気に現実の重みとなって圧し掛かり、私を自殺の地獄へと誘うことになった。けれど私は助かった、今目の前にいる七時さんが止めてくれた。最終的にはこれでよかったのかもしれない、彼と別れることで本当に私のことを想ってくれそうな人と出会えたのだから。

11、僕の責任

11、僕の責任

一方僕にとっても彼女との出会いはまたとないチャンスだった。働き始めて2年ちょっと経つが、女性社員とは友達程度の関係で、恋人なんてできる気もしなかった。そんなとき偶然とはいえ彼女を自殺から救えたこと、思い切って昼ご飯に誘って、今後親しくなるきっかけにできたらと思った。

昼ご飯を食べているとき、彼女からこんなことを聞かれた。

「ねえ、七時さん、今付き合っている人とかいるの？」

「いないけど」

「そうなんだ……」

意味深な彼女の質問と少しの沈黙。僕は心の中で期待した、脈があるんじゃないかと。でもさすがにすぐにというわけにはいかないだろう、僕は姿を見かけたことがあるとはいえ、二人でちゃんと話したのは今回が初めてだ。

「ん？　どうしたの？」

「私、七時さんと……」

「ん？」

「……今は、いいや。あとで話すね」

「そうか、分かったよ」

何かを言いかけた彼女だったが、やめてしまった、でもあとで話してくれると。

そして僕が待っていた瞬間はお店を出て、二人がそれぞれ会社に戻るために別れを告げた直後にやってきた。

「待って！　七時さん！」

「なに？」

「私、七時さんにお願いがあるの？」
「お願い？」
「責任をとってくれないかな？」
「責任？」
「うん。確かに私は七時さんのお蔭で自殺しないで済んだ。でも七時さんには私を生かせた責任があるんじゃないかなって思うの」
「なるほど」
「だから、1週間後に答えを聞かせて。夜の7時に駅の改札口の前で待ってるから」
「分かった。じゃあね」
「じゃあね」
別れる前にした彼女との約束、だけど僕の答えはもうこのときは決まっていた。

会社に戻ってきたのは1時20分過ぎ、中で受付の星野さんが駆け寄ってきた。
「七時さん、スーツずぶ濡れだよ！」
「雨が強かったからね」
「でも濡れすぎだよ。何かあったの？」
「ああ、まあ」
「ん？　何か嬉しそうな顔してる。いいことでもあったの？」
「まあ、ちょっとね」
彼女に聞かれて思わず零れた笑顔、いつの間にか外の雨も上がっていて、心の中もきれいに晴れ渡っていた。

番外編1、二人の始まり

番外編1、二人の始まり

二人がもう一度会ったのは、あれから1週間後のことだった。時間は7時半過ぎ、仕事の関係で遅れてしまった僕は、ちょうど改札口で機械にカードを通そうとしている彼女を呼び止めた。

「待って！」

「えっ！　あっ、七時さん」

「ごめん、遅くなって」

「もう、来ないのかなって思っちゃった。で、考えてくれた？」

「ああ、もちろん。でもちょっとここじゃ……」

「そうね」

二人は改札口の人混みを避け、奥の人の少ないスペースで向か合った。

「じゃあ、言うね」

「うん」

「僕と付き合ってください！」

「ふふっ、ちゃんと七時さん、分かっててくれたんだね」

「じゃあ……」

「喜んで」

「やったー！」

「私を幸せにしてね」

「もちろん！」

彼女が僕に求めた責任、僕が彼女に出した答え、予想通り間違えではなかった。そしてこれから始まる二人の恋人生活、でもこのときまだ僕は気付いていなかった、名前と僕らが出会って付き合い始めた本当の意味を。

第一章、あとがき

みなさんこんにちは、こんばんは、おはようございます、レンタンです。今回は新作の第一章が終わるにあたって、ちょっとだけあとがきを書きます、よろしくお願いします。

どうでしたか？　第一章「絶望の殺意」は。少しでも楽しんで頂けたら幸いです。この作品は僕にとって初めての推理物になります。正直、初めてなので上手く書ける自信は全くありません。でもこの作品僕は新しい推理物の形を多少なりとも示せたらと思っています。

推理物と言えば、何か事件が起こって、それを主人公が解決していく、それが一般的なストーリーになると思います。しかしこの小説では最初に犯人が事件を起こすことはないです。その代わり誰かを殺そうとしている人、つまり殺意を持った人を主人公が目撃することになります。

今回の第一章ではそれが彼女、七星逢さんでした。でも自殺の場合、当人が殺人を犯そうとした犯人だとしても、加害者だと呼べるかどうかは微妙ですね。死んだ瞬間同時に被害者になってしまいますから。当然現実問題、自殺者を殺人罪で裁くことはできません、なにしろ当人はもうこの世にいないのですから。

しかしこれからの話では、本当の意味での殺意、自分以外の誰かを殺したいと思っている人が登場します。それでは第二章「炎上の殺意」をお楽しみください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2218r/

僕と七つの殺意

2011年5月21日05時37分発行